



在りし日の三田元会長

三田さんにはずいぶんお伴したので
懐かしい。
最後に鶴見のお宅に伺ったのは札幌
に移られる少し前で、もう大儀そうに
藤椅子に腰を下ろしたままだった。写
真アルバムが手の届く場所に積まれて
あり、「時々取り出して凝っと眺めてい

三田さんの滋味

田口二郎

三田さんにはずいぶんお伴したので
懐かしい。
最後に鶴見のお宅に伺ったのは札幌
に移られる少し前で、もう大儀そうに
藤椅子に腰を下ろしたままだった。写
真アルバムが手の届く場所に積まれて
あり、「時々取り出して凝っと眺めてい

三田さんは独特の喚起力をもちうま
く昔の場面をとりだせる人のようだっ
た。ネパールにお伴したのは三十年も
前だが、夜キャンプで戦前の体験、ク
ル渓谷やカンチの風景を憑かれたよう
に訥々と話された。私達との旅で目に
したネパールの風物が昔日の旅のイ
メージを喚びもどしたようで、三田さ

三田さんにはずいぶんお伴したので
懐かしい。
最後に鶴見のお宅に伺ったのは札幌
に移られる少し前で、もう大儀そうに
藤椅子に腰を下ろしたままだった。写
真アルバムが手の届く場所に積まれて
あり、「時々取り出して凝っと眺めてい

1991 年 (平成 3 年)
4 月号 (No. 551)社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価一部 150 円

目次

- 三田さんの滋味……………田口二郎…(1)
海外の山……………(2)
「登山する犬」
計報 三田幸夫氏、笠原潤二郎氏、
桜井信雄氏……………(2)
ピンソンマシフに登る
……………田部井淳子…(3)
「タンボチェ僧院再建募金」お礼と
報告……………山田二郎…(4)
東西南北……………(4)
「金峰山の附近」「HAT-J」シン
ポジウム「知床岳登山記(2)」
河口慧海顕彰立像について「ダウラ
ギリ峰を 20 年振りに尋ねて」
図書紹介……………(7)
「神戸山岳会会報」「ヒマラヤ学誌
第 1 号」
自然保護随想……………(8)
報告……………(8)
「鳥海山南麓のスキー場開発方法
の変更を求める要望書を提出」「第
19 回山岳史懇談会」「1989 年度資
料受入報告(4)」「丹水会 10 周年に
集う」「第 28 回木暮理太郎碑前祭」
「山岳地域における自然エネルギー
利用に関するシンポジウム」
会務報告……………(13)
2 月理事会、新入会員(復活)、住
所・住居表示変更、タンボチェ僧
院再建協力募金者ご芳名
お知らせ……………(14)

▶日本山岳会事務取扱時間
月、火、木、土曜 10時～20時
水、金曜 13時～20時
日曜・祭日は休み
▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

お知らせテラフ電話

3234 六六五九

もなく三田さんは
大パイオニアだ
が、山でさえ縁と
つながったものは
ますます映えるよ
うに私には読め
た。

晩年に「底倉記」
という昔の心的風

んは二重の喜びを堪能されていたのだ
ろう。誰よりも感激されていた。私達
とちがい三田さんにとってそれはヒマ
ラヤとの再会であった。縁あるものと
の出会い、普通の人が考えられぬほ
どの深い興味を三田さんにもたらずも
のであったのだらう。

こんなことを考えながら三田さんの
著述を再読すると新しいことに気がつ
く。山の本では珍らしいほど夥しい数
の人々の登場。一人ひとりとの出会い
がその背景や人とのつながりを含めて
驚くほど几帳面に記されていること。

つまり一人ひとりに巧まずして熱い関
心がよせられていることだ。一期一会
とはこのことかと教えられる。初見で
すらすでにそうなのだから再見の場合
に出てくる情緒情感は格別のように記
されている。余程人間好きの人でなけ
ればこのようにはならない。書くまで

三田さんにはずいぶんお伴したので
懐かしい。
最後に鶴見のお宅に伺ったのは札幌
に移られる少し前で、もう大儀そうに
藤椅子に腰を下ろしたままだった。写
真アルバムが手の届く場所に積まれて
あり、「時々取り出して凝っと眺めてい

三田さんにはずいぶんお伴したので
懐かしい。
最後に鶴見のお宅に伺ったのは札幌
に移られる少し前で、もう大儀そうに
藤椅子に腰を下ろしたままだった。写
真アルバムが手の届く場所に積まれて
あり、「時々取り出して凝っと眺めてい

三田さんにはずいぶんお伴したので
懐かしい。
最後に鶴見のお宅に伺ったのは札幌
に移られる少し前で、もう大儀そうに
藤椅子に腰を下ろしたままだった。写
真アルバムが手の届く場所に積まれて
あり、「時々取り出して凝っと眺めてい

私の付度した三田さんの心の在り方に由来するものなのかどうか、そんなことを考えたのは逝かれた後のことである。合掌。
(一九九一年三月)

計報

三田幸夫氏

(会員番号九二四番、名誉会員、元本会会長)

二月十一日午前四時四十六分、入院先の札幌市の恵和会宮の森病院にて、脳硬塞のため死去。享年九十一歳。

葬儀・告別式は二月十五日午前十一時より、横浜市鶴見区岸谷の自宅で行われたが、本会からは、生花をお供えし山田会長はじめ、名誉会員、登高会関係者ら多数が参列して弔意を表した。喪主は、妻静子さん。

(三田幸夫氏略歴)

一九〇〇年三月三十一日横浜市で生れる。

一九二四年三月、慶応義塾大学経済学部を卒業。在学中は山岳部員として活躍。一九二二年四月の立山・剡岳積雪期初登頂。一九二三年一月の立山・松尾峠での遭難で九死に一生を得たことが特筆される。

一九二四年五月、秩父宮殿下一行と立山スキー登山。

一九二五年 カナディアン・ロッキーマウンテン・アルバータ遠征隊に参加。初登頂。

一九二六年 シンガポール千田商會に

海外の山

登山する犬

エベレストのサウスコルと言え、ほとんど八千呎に近い。そこに行き着くだけでも大変というのに、犬が無酸素で到達した、と聞いてたまげた。

四十男のカナダ人、マルチン・ウィリアムズは、昨年十月、仲間と世界最高峰をめざしたが、麓のペリジェで一匹の犬と知り合いになった。

各国隊で過密気味のベースキャンプまで、元気に犬はついてきたが、そこから下ろうとしなかった。アイスフォールを登り、ウェスターン・クウムを越え、ローツェ・フェースを攀じ、ついにサウスコルに達した、というのである。

ブルーアイスのローツェ・フェースの下りも、アイスフォールの梯子フィックス地点も、自力で他のルートを探して下った、というから驚く。筆者の知る限り、犬の最高到達高度と思う。

一八六九年、ヨーロッパ・アルプスの名犬、チンゲルが、モンブラン峰(四八〇七呎)に登った時は、シャモニで祝砲が撃たれたそうだが、登山する犬は、一般に無名で、その記録はなかなか把握しにくい。山の雑誌などにもまず載らない。幸い、犬好きの家人の追跡で大体の傾向はわかってきた。たとえばこんな具合だ。

一九八七年五末、インドのチャウカンバ1峰(七一三八呎)にインド・チベット国境警備隊の六人が登頂した時、二匹のボータイア犬が共にてっぺんまで登った。下りには苦勞したらしく、頂上から五人がわずか十二分

BCへスキー滑降したというのに、残る一人と犬二匹は三日がかりで下山した。七千呎峰の登頂というのはい。

その約一年後には、北米大陸最高峰のマッキンリー(六一九四呎)にフランスからはるばるやって来た白犬が五人のフランスの山男と登頂している。

八七年二月、田部井淳子ら日本人グループが南米大陸最高峰、アコンカグア(六九五九呎)に登った際にも、大きな黒犬がついて来て、テントに同宿までしたあげく登頂している。

筆者の体験でも、大学山岳部時代のことだが、三月の蒲田川からの穂高・滝谷合宿に麓からいつの間にか、白と黒のぶち犬がついてきたことがある。槍平小屋でんびりしているうちはよかったが、焦ったのは、登攀にも当然の如くついてくることだった。

シャンデリアのような豪華なブルーアイスとなっている下部の雄滝は巧妙に雪壁をまわりこんで乗っこし、D沢上部の急峻な雪面は爪から血を出して登りきって、涸沢岳のコルまで一緒に来てしまった。さすがに下りの雄滝だけは、ザイルでしばって下ろしたが、その登攀意欲には舌を巻いた。

以後、登攀する犬のことが気になっていったが、ついに八千呎をきわめるまでになったか、と感無量である。世界には山登りの好きな犬が多いだろうし、犬と登るのが好きな登山家もいるだろう。犬の登山記録を集めることができたなら、結構面白い物語になる気がする。「K2北壁、冬期無酸素単独犬連れ」なんて記録がそのうち山の雑誌を賑わすだろう。

(江本嘉伸)

海外の山

入社。その後カルカッタの本社に転じ一九三二年迄在勤。その間一九三一年一月、冬のロータリオンパス越えを行う。

一九三四年以降、紀屋の経営にあたり、第二次大戦中は、シンガポールの千田商會に復帰する。戦後は、岩井産業、万邦交易、三和興業、竹村商會等に籍をおく。

一九五三年、第一次マナスル登山隊長。一九五九年四月〜一九六八年三月。本會副會長。

一九六八年四月〜一九七三年三月。會長。在任中、本會のエベレスト登山計画の推進に尽力。七〇年の登頂に貢献する。

一九七三年十二月、名譽會員に推挙される。

一九六八年〜八六年 ヒマラヤン・クラブの日本代表。この間日印合同登山を通じ日印親善に尽力。

一九七四年 紫綬褒章受章。

〔著書〕

『山なみはるかに』白水社、『遠い山遙かな旅』新潮社、『山のガキ大将たち』二玄社、『わが登高行』茗溪堂、等がある。

〔著者〕 笠原潤二郎氏 (會員番号一〇三八番)

永年會員、前岩手支部長
十二月二十九日、肺ガンのため逝去されました。享年八十二歳。告別式は

一月五日盛岡にて行われましたが、葬儀は二月五日、改めて郷里の新潟県村松町で行われました。

氏は東京帝国大学農学部卒、岩手大学農学部教授。支部長在任中、一九七五年支部のカラコルム・マルビティン峰(中央峰・七二六〇呎)登山隊の隊長をつとめ、初登頂に成功した。

桜井信雄氏

(會員番号一三〇五番、永年會員)

ビンソンマシフに登る

田部井 淳子

「あと四十分でパトリオットヒルに着く、機体は大きくバウンドするからしっかりベルトを締めろ、しかし驚くことはない、南極へのフライトはもう四十年もやっているのだから安心するように。但しよいか、しっかりつかまっているのだ」

とパイロットがおごそかに告げにきた。チリの最南端ブントアレナスからDC6で八時間の飛行は終わろうとしている。広い、果てしなく白い大陸、南極。南緯八十度。滑走路もなにもない氷面に機体の一部が触れた。ガタガタとゆれる。窓外は一面の雪煙でなにも見えない。

思っていた程のゆれはなく飛行機は

二月四日に逝去されました。享年八十五歳。葬儀は既に終っておりすが、故人のご意志により、どなたにも連絡されなかった由です。

桜井(旧姓南部)信雄氏は北大OBで、昭和四年三月二十三日、井田清氏と共に、積雪期の利尻岳に鬼脇より初登頂している。(北大部報二号・会報一五六号)

(喪主は、妻美知子さん)

止った。おもわず拍手。とうとう着いた。南極だぜ。実現不可能の夢の地と思っていた南極へ一般民間人でも入れると判ったのは、一九八八年の秋だった。カナダ人が極地専門のアドベンチャーネットワークという会社を作ったというニュースを私は読んだのだ。すぐ南極用貯金通帳を作った。

十一月と十二月に二つの時期がありその中から自分たちの休暇にあうものを選ぶ。私たちは十二月二十九日ブントアレナス発、一月十七日着の日程を選んだ。お正月の休みをフルに利用出来るからだ。

ブントアレナスまでの航空賃、ホテル代を除き南極にゆくすべての交

通、装備、食事は代は一八五〇〇ドルでこれを事前にアドベンチャーネットワークに振込む。

私たちは十二月二十五日に成田を発ち二十七日現地入りした。パーティは日本人五名、アメリカ人二名、フランス人二名、ドイツ人一名と国際色豊か、その上ガイドはカナダ人だ。

アメリカ人のうち一人は七十五歳のアレンおじさん。クロスカントリイ用のスキー持参である。南極の夏の時期だけ臨時にパトリオットヒルと呼ばれる標高一〇〇〇呎にこの会社のテントが張られ五名が常駐している。無線機でチリに天気を知らせる役目もある。ここからビンソンマシフのベースキャンプ地まで運ぶセスナ機のパイロットはこの時期ずっとこの氷の上で生活しているのだ。

人も動物もまだ歩いていないまばゆい氷と雪の連続、もりあがってみえる雪の白い、果てしない広がり、ピラミッドのようにときどきまされた山々の風景をセスナ機から真近に見た時、どんなことがあっても腹を立てたり、おこったりするのはやめようね、生きていくうちにこんな風景を見られた私たちはほんとうに幸せもの、小さいことにクヨクヨせず寛大な心で生きようねと誓いあった。が現実の登山は少し厳しかった。第二キャンプまではソリを

引いても登れるゆるやかさであるが、この西氷河を登るのは私たちがはじめだ。第二と第三の高度差は八〇〇呎。かなり急な雪面を登るのでソリは使えない。通常第三キャンプから頂上への往復をしているが、速度の遅い私たちはもう一つキャンプを出すことにした。この第四キャンプ(四〇〇〇呎)で五日間風が吹きまくり停滞した。頂上までのルートはそれ程困難ではない。二十四時間明るいので時間に関係なく行動出来ることが幸いし、一月十九日の午前二時三十分、白夜の頂上に立つことが出来た。紙面が少ないので詳細は岳人、山と溪谷を参照していただきたい。頂上にこそ立てなかったが七十五歳の元気はつらつ、さわやか行動派のアレンおじさんの事については日本山岳会の会員の方々にもっとくわしくお知らせしたかった。山男かくあべしと思える紳士であったからだ。

「タンボチエ僧院再建募金」お礼と報告

会長 山田 二郎

一九八九年五月より継続してまいりました再建のための協力募金を、締切りました。会の内外から五、七五二、三四〇円(三月二日現在)という多額のご芳志が寄せられました。中でも、ネパールトレッキングを扱うア



金峰山の附近

小野 幸

奥秩父の金峰山から派出する尾根のひとつに八幡尾根がある。その尾根の途中に八幡山があるののでそう呼ばれる。その頂上に八幡様をまつてあるのであると言いつたえられているが、ちいさな岩片をひろいあつめて作られた形だけの祠がひとつあるだけで、ちようど黒金山のそのもっとちいさいものと思えばよい。これは大正時代にこの山で盛んに水晶が掘られた頃に

でも作られたのであろう。

しかし、この山へは奥秩父のすきな人々もあまり訪れてくれない。今では完全な道も消えてしまったが、登るにはそれほど苦しくはない。木暮碑のある金山からなら日帰りの山だろ。あるいは金峰の帰りに金山道をとる人なら七人行者をすぎてはい松の中をがむしゃらに目の下に見える八幡山をめざして降りるのもよいが、それは晴天の時に限る。尾根らしい所に出てそれをたどれば頂上に着ける。木賊峠からも縦走できるがすこし苦しい。東沢と西沢の間の石塔尾根や信州側から国師岳にのびる長峰などをやった人ぐらいでなければいけないだろう。頂上から金峰を仰ぐのによい所のひとつである。だからハイキングのつもりで行ける山ではないと思う。

この八幡尾根のとなりに中尾根がある。

ルバイン・ツァーサービス、西遊旅行、マウンテン・トラベル、アトラス・トレック、イースト・コーポレーション、アドベンチャー・ロードの各社からは、大口のご寄付をいただきました。日本山岳協会他の協力団体と計り、速かにネパール向け送金する予定です。長期にわたる募金活動に、深いご理解をいただきました皆様にご心よりお礼を申し上げますと共に報告いたします。

る。金山沢とビワ沢の間の尾根で大日岩の先の丸山にぶつかるもので、これも知られていない。戦前は金山沢にいい滝があったがくずれてしまった。とりつきは金山から尾根までは道がある。尾根すじは数か所、露岩の大岩が出てくるのを越すか廻りながら登るわけで、瑞牆山から大日小屋に行く多くのコブをすぎるものと考えればよいがそれよりすこし苦しいかも知れない。

このふたつの尾根は道らしいものはなく、もちろん導標はない。奥秩父でもそんなところはだんだんすくなくなっていくのがさみしい。大弛峠や富士見平の下まで車で行ける時代になつてしまったのは、よろこんでいいのか、かなしんでいいのか。

金峰の付近の滝で大きいのは三つほど数えられる。不動滝、大日の滝、そして千丈滝あたりであろう。不動滝は瑞牆山麓にあり、釜瀬の大滝とも呼ばれているが、登山道のわきにあるのでだれでもおなじみのものである。大日の滝は金峰の新道を通った人はその滝の音だけは聞いたであろう。近づかねば見えぬから大日沢を遡行するしかない。大日小屋からは降りるより登る方がよいと思う。千丈滝は八幡山の南、伝丈沢の上流にある一本の品のよい滝で一見にあたいする。黒平から伝丈

沢を遡行する手もあるが、ただ滝を見るだけなら、水晶峠あたりから適当にひと尾根越して降りれば沢に着ける。もちろん道はまったくないが、奥秩父を苦しんで歩いている人にはあたりまえの方法である。

以上の尾根や滝はこの奥秩父に年季を入れた人々に知っておいていただきたい気持ちでしたためたのである。

HAT-Jシンポジウム

ヒマラヤの自然を守る懇親会

日本ヒマラヤン・アドベンチャー・トラストは、一月十三日に東京都勤労福祉会館で「ヒマラヤの自然を汚染しないために・テイクイン・テイクアウト」と題して登山者有志によるシンポジウムを開くとともに、岡島成行氏の講演に続いて、懇親会を開いた。

シンポジウムは、持ち込む荷物を出来るだけ軽くするための具体的方策など、多岐にわたって、細部まで実践活動に基づいた意見が出され、例えば食料などでも、包装の軽減はどの程度行なえるか、なども失敗例を含めて意見交換が行なわれた。さらに検討を続けデーターを整理して発表されることが期待されている。

岡島氏の講演は、アメリカの環境活

動に大きな影響を与えた十九世紀の三人のナチュラリストの事跡を中心に、現代のアメリカの環境保全活動、日本の活動との違いなどについて、会員数でも桁が違いう話に参加者は圧倒された。

夕刻から開かれた新年懇親会には、山田会長、澤村日山協副会長、遠藤H A J会長、労山の野口事務局長など山岳四団体関係者、吉澤一郎氏などのヒマラヤOBのほか、ネパールに興味があるという一般会員も参加して、高所登山に限定しない専門的でない環境シンポジウムも開いてもらいたい、などの注文も出された。

(岡塚貞亨)

参加者(順不同・敬称略) 神崎忠男、遠藤京子、佐藤正倫、酒井国光、山本篤、藤井正彦、山田二郎、吉澤一郎、野口信彦、尾形好雄、松田雄一、遠藤登、穴田雪江、遠藤光男、平松和世、大島輝夫、斎藤健治、須田義信、堀井昌子、木下雄、武田満子、阿部隆一、森田己男、中山和江、中野美命子、石井哲夫、池田俊男、吉田弥、山田岳俊、大森弘一郎、柳昌明、福田智恵子、加藤いずみ、中園隆夫、江尻健二、小倉厚、南英治、山口俊輔、岡島成行、林田正幹、菅沼景子、長井正、牧潤一、大塚玲子、伊藤興平、澤村幸蔵、楠本陽子、小島守夫、小倉茂暉、小倉童子、寺沢玲子、中岡久、山森欣

一、山中芳樹、須藤健志、高橋堅、出口当、堤信夫、土居正勝、中条昌子、石田稔郎、岡塚貞亨

知床岳登山記(2)

田中 三郎

丈の低いハイマツ帯の次には、丈の高いハイマツ帯が続く。二層くらいもある大きな岩塊の連続の上に茂るハイマツ帯を登り下りを繰り返しながら、藪漕ぎを続けること三十分、突然知床沼畔に出た。四時三〇分だった。目指す知床岳が間近に見える。心が躍る。

沼畔はジュウタンを敷き詰めたような草原の湿地帯のため、 TENT を張る場所を見つけるのに苦労したが、ようやく適地を探し、TENT を張る。幕営の適地は、ほかに対岸の沼畔。知床岳山頂直下の無名の沼畔のようだ。間もなく知床岳中腹から山頂まではガスで見えない。訪れる人の誠に少ない沼一帯は、千古の静寂に包まれていた。

第三日、ガスと小雨

五時一五分出発。知床沼のクロの道をたどり、知床岳へ向かうが、一三二層と一三八二層の二つのピークの間、知床岳はもう目と鼻の先の距離にあるはずだが、濃いガスのためその姿は

まったく見ることができない。おまけに足が地につかないほどのハイマツの藪がつづき、全員互いに離れないように声を掛けあいながら藪こぎを続ける。

高度計で一六〇層の地点で、磁石と地図で現在地を確認し、相変わらずの藪の中を進む。視界は二十層くらいしか利かない。ハイマツにおおわれた斜面を急降下したら、沼の西岸の十層先に出る。対岸はガスで見えない。時刻は九時二〇分、高度計は一二五層を示している。沼畔にはチングルマの実が咲いていた。

三十分の休憩の間に、川越、民田の二名は山頂への踏跡や道標がないか偵察に出かける。その結果、沼から知床岳に向けて二〇層くらい行った所に、赤いテープがあるのが見つかった。このテープを目印にして山頂へ向かうが、雨がまた容赦なく降り始めた。全身ずぶ濡れとなり、肌着とシャツの上に雨着をきているが、あまりの寒さに動いていなければ、いても立ってはいられない。

稜線上では、オホーツク海の強い風が一段と寒さを増す。一キロ足らずの距離に二〇層の登りが三度もあり、ハイマツ帯が少しは薄くなったものの、私達の前進を妨げる。しかし、一二時一七分ついに一二五

四角の山頂に達した。

山頂は小広い大地になっている。一等三角点標石が無傷のまま、地上から十センチほど姿を現わしていた。予定を四時間も上まわる七時間を要した登山であった。

悪天のため、写真撮影もそこそこに直ちに下山。知床沼畔テント場に一六時三〇分着く。予定時間を七時間上回る十一時間十五分かかる、雨と藪との闘いであった。夜は食料も燃料も予備が残っているのみで、肌着を乾かすほど燃料の余裕がなく、全身ずぶ濡れのまま一夜を明かしたのである。

(平成二年八月十五、十八日)

河口慧海顕彰立像

について



河口慧海顕彰立像

河口慧海師の出身地、堺市では、南海本線七道駅の駅前交通広場が、平成二年三月に完成したのを機に、河口慧海師の顕彰立像を建立した。

この計画は、本会今西寿雄前会長が元ガバナーであった、堺ライオンズクラブ(日本 No. 67, 3351 B 地区)が、チャーターナイト二十五周年記念のアクティビティとして企画されたもので、同クラブが資金を集めて製作し、堺市へ寄贈したものである。

制作者は田村勉氏(大阪市天王寺区在住)、台座の寸法 2.6 m × 3 m × 2.5 m、像の高さは 1.98 m。製作費は七〇〇万円を要した由である。

なお本立像の台座には、川喜田二郎撰、奥野幸夫書になる「河口慧海師の生涯」の銘板がとりつけられている。

(Y・M)

ダウラギリ峰を

二十年振りに尋ねて

太田 徳風

同志社大学山岳会の創立六十周年記念行事として、同志社の登った西ネパール三山即ちアビ、サイパル、ダウラギリを特別機で廻る計画が発表された。若者は足と体力がある、年寄にはそれがない。若者に対抗するにはこの

計画に便乗するしかない。これで昔懐かしいダウラギリを見ることができ、で七十八歳の老齢を顧みず参加した。出発は雨の心配のない十一月下旬に西ネパールを特別機で旅遊する。募集は山岳会OB二十名。日時は十日間。大阪・バンコック・カトマンズ。飛行コースはボカラ飛行場よりダウラギリ・サイパル・アビの順に廻る。

十一月二十三日ボカラ飛行場より早朝スタート。機種、ピラタス・ポーター六人乗小型機、高度六五〇〇呎、飛行距離往復で約一〇〇〇km、酸素マスクの設備あるも暖房設備は機内になく寒かった。防寒着をまとい搭乗した。希望者が次々と減少し結局六名となってしまった。アビは三十年前、サイパルは二十七年、ダウラギリは二十年前に登ったのだ。各隊に参加した者が一名ずつ搭乗している外三名、計六名が搭乗することとなった。

一同は嬉しさ、懐しさ、感激に加え多少の恐怖心と、言うに言われない緊張感で搭乗した。上昇高度は見る見る五〇〇〇呎となり、アンナプルナ連山の前山マチャプチャリーの切り立った岩盤がよく見える。

次に見えたのはアンナプルナサウス、多少遠望気味だが頂上付近の岩質がよく見える、素晴らしい眺めだ。カリガンダキ上空を越えると待望の

計画に便乗するしかない。これで昔懐かしいダウラギリを見ることができ、で七十八歳の老齢を顧みず参加した。出発は雨の心配のない十一月下旬に西ネパールを特別機で旅遊する。募集は山岳会OB二十名。日時は十日間。大阪・バンコック・カトマンズ。飛行コースはボカラ飛行場よりダウラギリ・サイパル・アビの順に廻る。



機上より見たアビ南面

ダウラギリ主峰だ。かねて、でかいとは知っていたが近くで見ると余りにもでかい、ど肝をぬかれる感。南面を飛行しているの、我等の登った北東稜は良く見えない。北面の梨ルートは全然見えない。西側には二ヶ月も住んでいたマヤンデー氷河のベースキャンプ地点が遠く下方に見える。懐しい思い出が走馬燈のように頭脳を駆巡る。しっかりとこの風景を眼に焼き付けておいた。空は青く清い、風もなさそうだ。天国にやって来たかの感じがする。これからはサイパル峰に向うのだ。途中、常慶さんが苦労したカンジロバ峰がある。機内は爆音が高く何を話しても聞こえない。時々酸素を吸う。サイパルまで小一時間、その間、よくぞこんなに高山が沢山あるものだ。こ

んな遠い所を二ヶ月もかかってサイパ
ルまで歩いた故児島勘次隊長はヒルに
かまれながらどんな顔をしてこの長い
道を歩いていたのだろうか。ここに同
乗している松村隊員はどんなことを思
い出しているのだろうか。近付いた頃
は少し雲がかかって全貌は見えなかつ
たがその峻険さは想像がつく。

ここからアピまではそう遠くない。
雲が少なくなると頭上に笠雲が被いか
ぶさっている。かつて三十年前の登頂
に、苦勞に苦勞を重ねた懐しい山だ。
当時北方チベットに見えるグルラーマ
ンダーター即ちナムナニ峰の勇姿とそ
の美しい湖、マナサローワ湖が良く見
えて、二十数年後ここに登るきっかけ
となったのだ。当時の津田隊長は今こ
こでどんな思いにひたっていることだ
ろう。

特別機は間もなく国境近くのネパー
ル・ガンヂ飛行場に到着した。足が地
につきやれやれ助かったと、安堵感が
した。三十分たらずの休憩、給油も終
り、帰路についた。私は操縦士の隣席
に座った。

帰りの高度は三〇〇〇びだが下を見
るとゾーッとする。だがもう酸素の必
要はない。機内の足場は狭く、全く直
立不動の姿勢だ、窮屈そのもの。雄大
な景色、透き通るような美しい大空、
初めて優越感を味わった。間もなくポ

カラのペワ湖が見えて来た。フライト
時間は約四時間、無事振出しのポカラ
飛行場に舞い戻って来た。

どうやら本当に足が地に着いた安心
感が湧いて来た。何とか無事目的を果
してフィッシュテールロッヂに戻り、
ようやく人間らしく落ち着いて来た。
これで念願を果し、素晴らしい冥途の土
産として無事帰りが着いたのだ。



図書 紹介

神戸山岳会 会報 創立五十周年記念号

神戸山岳会編

神戸山岳会は一九四〇年秋に神戸市
内にあった数個の社会人登山団体が統
合し、当時の激しい戦時下の日本の国
情に応じ統制団体的な性格をもって、
顧問に藤木九三氏、津田周二氏、会長
には水野祥太郎氏が就任して誕生し
た。一九三七年に勃発した支那事変は
年とともにエスカレートし、大東亜戦
争へと突入して、山へ登れる若い人の
数は日と共に減少してゆき、山岳会の

活動も創立後二年あまりで休眠に入っ
てしまった。終戦になってから各地の
戦場から生き残って復員して来た、元
「嶺同人」から参加した会員が中心と
なり、焼け残った登山用具を寄せ集め
て活動を再開した。五十周年を迎えた
一九九〇年現在、会員は六十八名。二
十歳になったばかりの若者から七十四
歳の高齢者にわたっている。

「創立五十周年記念号」は過去の年
次会報では詳しく報告していなかった
記録を追想の形で集録し現役会員の紀
行・随想などを加えて編集している。

一九七三年から九〇年に至る十七年
にわたる苦心の踏査を果した積雪期の台
湾の「三尖五岳」、社会へ出て三年間
働いて貯めたお金を握ってアルプスか
らピレネーへ、さらにアフリカに渡り
ケニヤ山からキリマンジャロ山へと二
年間の放浪の旅を続けた青年の記
録、マツダのルーチェバン一六〇〇の
中古車を操ってカラチからカブール、
テヘラン、イスタンブール、アテネ、
スイス、パリへと走破して、デマベン
ド山、アラム・クール山群、ジロサト山
群、スイスアルプス等の登攀を楽しん
だ「中南西アジア踏査登山隊」、老齡
会員の二度にわたるブータンヒマラヤ
トレッキングなどは興味深い。夏山の
合宿としては毎年劔岳の他穂高岳周辺
でも行っているが、劔岳へは殊に

終戦後間もない頃から集中して登攀を
重ねて来ているのでその記録を集成し
ている。

神戸山岳会がこの五十周年を契機と
して新しく生れ変わりさらに発展してゆ
くことを祈念している。

一九九〇年九月 神戸山岳会発行
一七二頁 (片山英一)

ヒマラヤ学誌第一号

京都大学ヒマラヤ
研究会編

京都大学では従来から数多くの登山
隊を海外に派遣し、目覚ましい学術研究
の業績をあげ、また日本登山医学研究
会の中核的メンバーとしてすばらしい
活躍を果していることは皆さんはよく
ご存知のところである。

これらの過程の中で、いまだに解明
されていない点の多く残されている、高
所の低酸素環境下に於ける人体の生理
学的順応の機構を、ヒマラヤをフィー
ルドとして医学的に究明し、さらには
広く環境科学の研究を含め専門的、総
合的に進めていきたいというのが意図
するところである。

今回は、特集、ヒマラヤ医学学術調
査登山隊一九八九年報告として第一
部、第一次隊ムスタークアタ医学学術

登山隊と、第二部、第二次ネパールクーンプ医学術調査隊の報告から構成されている。

前者ではまったく新たな試みとして野外での医学研究の方法をヒマラヤ七五〇〇メートル峰を舞台に確立することであった。それには遠心分離機を初めてした医学研究用機器の高所に於ける作動を確認し、液体窒素の輸送などの問題を实地に確認した。その結果、登山期間中採取した血液を冷凍保存し、それをもとに各種のホルモンや酵素活性の測定が可能となった。従来では考えられなかった画期的なことである。生理学的検査にも項目がふえ、低圧実験室による急性暴露との比較、気象については、高所医学研究には高度より気圧を基準にして考える方が合理的である、などの報告があった。

後者ではナムチエバザールに診療所を開設し、高所に永住する民族の医学調査を行なった結果を報告し、さらには高所に於ける神経系の機能、免疫反応、網状赤血球の変化など極めて多彩にまた専門的考察が報告されている。これらの調査は、一九九〇年に予定されている第三次調査、ヒマラヤ八〇〇〇メートル(シシヤパンマ)超高所での生理学的研究ならびに高所住民の医学調査に関する予備的報告であるとしている。次号の発刊が待たれる。

〔自然保護随想〕

自然保護の象徴・函南原生林を歩く

一月二十日函南原生林の雪路を歩いた。ここは山麓の函南町、三島市、清水町が灌漑用水の水源涵養林として徳川時代から生木の伐採はもちろん、下草まで刈り取りを一切禁止して禁採林と名付けている。山は篠竹を主体としカシ、ブナ、アカガシ等の巨樹が散在し、原生林の自然状態をよく保持している象徴的な山林で、巨木の裸木の全貌を見たい気持ちで、箱根町から熱海行バスで函南原生林入口のバス停で下車しひと筋の細い雪路を下った。京浜地区で一月十七日降った雨が標高八〇〇メートルあるこの辺りは雪降り、原生林内の積雪は樹林に遮られて相当残っている、足元に気を配って約十五分下ると左側にアカガシ(ブナ科)の巨木があり立札によると、目通り六メートル 根回一三メートル 樹高二十メートル 樹齢七〇〇年

根元より二メートル辺りから東寄りに樹相を傾けて枝張りを天空に広げているのに見惚れて、よくぞこれまでと観察した。

続いて斜面を蔽う樹林を眺めつ下って行くと右側の奥にブナの巨木があり、この原生林中でも殿様格の樹相を構えており案内板には、

目通り六・三五メートル 根回一二メートル 樹高二四メートル 樹齢七〇〇年、とある樹高の三分の一位までは幾筋もの樹幹を寄り合わせたような奇態な姿であるのも幾星霜の風雪に耐えてのことと思われた。枝張りには幹の一カ所から一斉に八方に張り出し、明るい空に枝をひろげて清新の気を漲らせているようであるのは、裸木の枝であっても、春を待つ新しい生命を宿していると思われ、悠久の自然を語りかけられるようで、私との邂逅も一期一会と言うべきであり、原生林の自然美に接した喜びとともに自然環境の保護に努むべき責を負うことを心に誓った。

(中井 修二)

報告

一九九〇年三月 京都大学ヒマラヤ研究会刊 B5判 一二六頁 頒価 一五〇〇円 (大森薫雄)

鳥海山南麓のスキー場

開発方法の変更を求める

要望書を提出

自然保護委員会

「名山と呼ばれるにはいろいろの見地があるが、山容秀麗という資格では鳥海山は他に落ちない。」これは深田

久弥氏の名著『日本百名山』鳥海山の項冒頭の一節である。この名山に地元山形県八幡町が大手デベロッパーを誘致して標高六〇〇メートルから一二〇〇メートルに延べ三・八キロのスキーコースとゴンドラリフトを建設するという計画のあったことが昨年の自然保護全国集会で報告された。当委員会としては当日の集会決議にもとづき直ちに小委員会を設置し、現地調査を行ない種々討議の結果、自然破壊につながるものとして、次のような趣旨の要望書を提出することとした。

①大規模な索道や付帯設備の建設は、「鳥海国定公園」の保護及び利用に関する基本方針」に反する。②日本有数の冬季豪雪、強風地帯に属し、スキー場開発には危険を伴う。③南麓斜面は平均傾度九度でスキー場の魅力に欠け、営業が成り立たないおそれもある。④地元住民の創意を活かし、貴重な自然を壊すことなく地場経済が発展してゆくような道を選ぶべきである。

二月理事会での承認を得て同月二十三日沢井委員長と共に八幡町役場を訪問、委員長名にて作成したこの要望書

を提出した。当日は庄内平野に地吹雪が舞い都会から出て来た者にとっては肌をさすような寒い一日であったが、町長応接室で約一時間、役場関係者の方々と懇談した。席上、八幡町長は地域活性化のため若者が町に来てくれるにはどうしてもスキー場が必要であること、ある程度の自然を活かした開発については理解してほしい旨の発言があり、当方からも林間ツアーコースやクロスカントリーコース等自然を壊さない形でスキー場のあり方を要望、開発につき再度の見直しを求めた。

五年の歴史のうち創草期から終戦直後までの二十数年について手なれた口調で語られた。

大正十四年に母体のスキー山岳部から山登りを目的にする集団が分離して法政大学山岳会を組織し翌年に山岳部に改称、昭和二年学友会に公認されたといった他大学と違った経緯を語っている。スキー山岳部の部長であった田部重治先生に創部以来昭和二十年迄部長をお願いし、部員は先生から山への考え方や心構えについて直々に薫陶を受けた。先生は個性的な山登りを主張され、幅広い山行を行うべきだと言われていた。

1989年度資料受入報告 (4)

資料委員会

番号	品名種類	数量	受入月日	寄贈者	保管場所
592	布バケツ 空色 キャンバス製	1ケ	89.11.27	坂 倉 登喜子	O
593	マナイタセット (チョッピングボードセット)	1セット	"	"	M
594	キッチン小物セット 手造りケース入	1 "	"	"	O
595	トランシーバー ANY 製 1969年 10月 14日 親1 子2	FB 500 型 1式	"	"	O
596	鋸 秀山荘	1本	"	"	M
597	" "	1 "	"	"	O
598	ジャックナイフ	1 "	"	"	M
ナシ	アルコールセット	1セット	"	"	M
155	写真 (山梨県山県館の古いもの)	4枚	89.12.19	田 畑 真 一	
156	A.C. メンバーのサイン入りメニュー	1枚	90. 2.20	富 田 健 一	
267	ピッケル 秩父宮使用のもの	1本	90. 1.16	秩 父 宮 家	
701	登山靴 "	1足	"	"	
702	クレッターシューズ "	1足	"	"	
703	毛手袋 "	1双	"	"	
704	雪眼鏡 (ケース付) "	1	"	"	
ナシ	海外登山国際交流メンバーからの土産品 (ネクタイ、メタル、キーホルダー、ペナント)	4点	"		
ナシ	Tシャツ	1枚	90. 3.20	スイスアルパイン ミュージアム	
618	マナスル記念テレホンカード 1966年	1枚	"		
619	ケネディコイン 1967.3	3枚	"	リンキー氏 (会報 263号)	
※No. 155の写真4枚の時代 (安政3年、大正初期、昭和初期、昭和38年)					

には『スキーの山旅』大村書店(田部重治編)を発行し、日本の山々の冬の開拓紀を三十四編掲げた。

初期の開拓登山としては大正十五年十月、新雪の燕・槍・小槍、昭和二年千丈沢・赤岳、昭和三年笠・西穂方面、昭和四年双六谷・高瀬川の新ルート・小槍西壁、昭和五年厳冬の北穂、谷川岳一ノ倉、昭和七年冬の奥穂、昭和八年鋸岳・猫又山において初登攀や初下降或は新ルートの開拓を行った。

戦後昭和二十一年から第二代目部長に桂田利吉先生を迎えているが、同先生も英文学者で山を愛し、大自然と融合調和の精神を有しておられ、部の底流には先生方のご指導によって一貫し



山岳史懇談会会場風景

たものが流れていると言えよう。

機関誌『山想』は創部の三年後に第一号を出版し三号まで毎年続いても、その後はとぎれがちで、現在は平成二年の八号が最新刊となっているが、OB会としては「山想会だより」等の形で会報は発行し続けている。

創部当時一般に登山そのものを歌った歌がなかったもので、自分達で歌う歌をつくらうと試みた。部員で作詩作曲を行い冬春夏秋の詩を『山想創刊号』に部歌として発表し、創部十周年記念に『結び』を追加し曲とも発表している。その後昭和二十年後半に「エーデルワイスの歌」としてダークダックスが歌い、歌声喫茶で歌われ楽符や詩について度々照会があったので、日本著作権協会に著作権信託契約をしたところ、当時は毎年冬ミントを貰える収入があったと裏話あり。

「かもしかのバッジ」リーダー章、部員章、谷川岳毛沢小屋の建設のエピソードに続いて第二次大戦前後、法政大学山岳部最後の合宿と位置づけた冬の劔合宿や食糧不足時の登山、そして終戦直後鹿島槍北壁の中央壁、三角ルンゼの初登攀をはじめ南北アルプス登攀縦走記録の説明あり。

最後に創部当初から出合いのあった千丈沢を巡る山々については、昭和二十四年十二月から翌一月にかけて、長

年の願望であった北鎌尾根の末端から大槍までを往復することに成功したところによって、二十三年間続けてきた千丈沢研究に終止符を打った。

(出席者 十八名)

その後懇談会に移り種々のエピソードが話され、最後に出席のOB関口山想会々長、上北・高橋新田監督、五十島氏による正調、法政大学山岳部々歌の披露があり、同席者一同唱和する機会を得た楽しい会合となった。

なお、嵐の様な風雨と昼間の三田幸夫元会長の葬儀が重なり、集まりが十分でなく残念であった。題目はめぐる人々となっているが、当稿では部長以外の個人名は割愛させていただいた。

(南井英弘)

丹水会十周年に集う

記念行事および記念誌

丹水会のたびに配られる会員通信「丹水」には、丹水会は山岳会の丹沢の清き流れとALCOHOLをこよなく愛す仲間の集いです。誰でも参加でき、語り合う場を年二回開いております。丹水は堪酔の集いです。時には勉強もして、(山懂子)と丹水会幹事古谷聖司さんの言葉がある。

その丹水会が十周年を迎えた。

十周年にあたり、どんな催しをしようかと、近藤信行さん、大森薫雄さん、鳥居亮さんを中心として幹事達が集まり、十周年行事の検討会を開いたのは、平成元年九月、丹沢荘においてであった。

「記念集会、会員による作品展、展示即売会、記念誌の発行、記念品は何にするか」等具体的な行動計画が出来上がった。

そこから十周年記念事業に向けての歩みが始まった。当初は、堪酔の集まりで、そこまでできるかな、と思われたことが、中心幹事、古谷さんの熱意と行動力に魅かされ、また堪酔に集う人達の和で、一つ一つ積み重ねられて、十周年の記念すべき日を迎えることができた。

十一月二十三日、快晴。九時、幹事達が大倉に集まる。自称、若者組は会員の人達から集った絵や写真、色紙を塔ヶ岳の頂上、尊仏山荘まで上げるのである。留守組は、大倉山の家にて、津久井で売り出し中の工芸品、カリ、リオグランデ、パロッサの木目の見事な、だ円形の木に、金具を取りつけ、記念品のループタイと、ブローチを作成する。裏には、丹水会の焼印が入っているという細かい気配りまでである。

記念誌への印おし、宴会の買い出し準備をする等、用意がととのった頃、

丹水会参加の人達がちらほらと到着しはじめる。今宵の参加者は六十二名、相変わらず多い。早く来た人達は通信「丹水」や記念誌「丹水」を読みながら、近況や山行を語り合う。

六時、恒例の記念講演が始まる。今回は塔ヶ岳尊山山莊経営者の山岸猛男さんによる「ああ、ふる里の山河よし」ということである。

終戦後、外地から引きあげてきてから、山小屋経営者となり、今日に至るまでの思いを淡々と語られる。静かな語り口と山を恋うる心情や山への愛情が参加者の心に染み入る講演であった。

宴会は、堪酔ゆかりの「飛驒娘」に始まり、各地の銘酒に、ワイン、ウィスキーに紹興酒と並び堪酔の名の如き宴となる。

十周年を記念する思い出話や、印刷の香も新しい記念誌の話題や山行話に、七夕様ならぬ年二回の会う顔を、つきぬ話題で夜が更けるまで楽しい語らいが続く。

二十四日も快晴。政次郎尾根、源次郎の沢、新道と三つのコースに分れ各々に塔を目指す。新道は希望者が多く、賑やかな登りであったが、カヤトの道、杉林、滝、見通しのよくきく開けた尾根道と変化に富み気分よく登ると書策小屋の下にとび出し後は、政次

郎方面から来た道と一緒にいるおすすめコースであった。

頂上では、裾野まで雲一つない富士山が迎えてくれ、相模湾、三浦半島、大島までが望めた。

鹿の鳴き声に誘われてふりかえると、塔頂上では珍らしい鹿の迎えもあり、空には、のびやかに、ハンググライダーも舞っていた。

小屋には、新道、政次郎、沢コースの順に到着する。前日、運びあげられ展示された作品の鑑賞会が早速、はじまる。そして乾杯、十周年の素晴らしい山行と、仲間の労を、ねぎらい合った。

下山は、全員おすめコースの新道を降り五時頃には、大倉山の家へと戻る。各々が、実り豊かな満ち足りた丹水のお土産を持って帰路についた。

作品展は、山岸さんのご好意により以来一月末に至る迄、展示させていただき、正月山行の登山者にも十分、鑑賞してもらい、二月三日また若者組に背負われて山を下りた。

これで十周年の記念行事も名実ともに終了となったのである。

丹水十周年記念誌「丹水会が十周年を記念して作ったのが丹水である。

丹水は、石川治郎さんの「丹沢とブナ」の特別寄稿にはじまり、大森薫雄さん「丹沢の山と人」、近藤信行さん「丹沢の山と水」、山岸猛男さん「あ

あ、ふる里の山河よし」が載せられている。つづいて、座談会、十年のあゆみとなり、わたしの丹水会では、丹水会に参加した人達の思い出が百十三頁に及んでいる。さらに付録として、百三十頁余りの丹水会講演記録が続く。

この講演は、石川さんの「丹沢回顧」に始まり、宇山幸治さん、H・シユートルテさん等、丹沢にゆかりの深い人の講演集である。さらには「山岳地帯における自然エネルギー利用の実用化」鳥居亮さんに及び、「山と動物の話」北原正宣さん、また最近のブームにふさわしく「中高年のための登山と健康」大森薫雄さん等、丹水会の人脈の広さに目を見はり丹沢をより深く知る参考となるものである。本書は付録に目を通すだけでも、おすめしたき本である。

原稿集めから、ワープロでの原稿整理、編集と、夏休みも返上しての編集幹事の手づくり記念誌であり、堪酔の人の和の温もりが、伝わってくる一冊である。ルームにあります。一冊千円(送料別)。(細井澄子)

第二十八回木暮理太郎翁

碑前懇親会報告と

次回の予告

標記の会は、一九九〇年五月十九日

金山平の碑前で開催された。例年、雨にあうことが多いが、碑前祭を始める頃から晴れて来た。

木暮先生を知る人、年々少なくなってきた。本年の記念感話はその一人、病をいえたばかりの金山淳二会員にお願いした。

木暮先生に、初めて会ったのは、昭和六年六月十七日、慶応大学山岳部の講演会の席であった。内容は「ヒマラヤの地理的概念」と題するもの。横先輩以下二十九名の若者が相手であった。第一印象は「ひげをはやした、こんなおじいさん」それが、ヒマラヤの山群の標高から初登頂者などを話したじめたのでびっくりした。昭和六年当時のヒマラヤは、今とちがって、あまりにも遠い存在であったからだ。

二人目は、河野幾雄会員が、木暮碑建設にまつわり、小野幸さん、神谷恭さん、佐藤久一朗さん、渡辺宏之さんや三井松男さんなどの名をあげて、思いうを語って下さった。

夜は、例により、堀口丈夫会員をチーフとする料理番が腕をふるった山菜料理の数々に舌づつみをうった。三井松男前支部長宅をはじめ、参加者からの多数の差入れも、座を大いに盛りあげ、夜のふけるのも忘れさせた。

翌日の記念山行は、長駆、御坂山塊の春日沢の頭を目指した。中央道から

黒沢峠まで車をあげ、甲府盆地をへだてて、南アルプス、ハケ岳、奥秩父の山々の眺めを満喫し、塩山駅で流れ解散となった。

△参加者▽ 秋山かおる、荒木正弘、飯島真理、池田稔、池田陽子、石垣政雄、石間信夫、磯野兼二郎、今井洋地、岩堀瑞子、確井健一、内山城、遠藤靖彦、大西恵子、岡部みち子、金山淳二、金子弘枝、北村義男、木村俊博、久米実、河野幾雄、小林啓助、小林基子、小松崎和子、小松崎幸子、込田伸夫、近藤友好、近藤久子、里見清子、篠原健夫、高田眞哉、田村英也、津田和巳、鶴岡元之助、寺島美千代、富山真紀子、鳥居亮、中村久美子、滑志田隆、林善一、平井和雄、福島一郎、藤宗正彦、堀口丈夫、前田清子、宮下啓三、森武昭、山村秀子、山村正光、山本麻子、山本美津子、山本稔、渡辺富士子、以上五十三名

(山村正光)

本年、第二十九回は、左の要領で行う。
日時 五月十八日(土)～十九日(日)
場所 山梨県北巨摩郡須玉町金山平宿泊 右同 有井館 TEL 0551-451-0455

会費 八五〇〇円 宿泊、食事、記念品、山行交通費をふくむ。
交通 JR中央線韭崎駅下車、増富ラ

行事

ジューム温泉行きバス終点下車
舗装道路を徒歩九〇分(タクシーの便もあり)
十八日 十七時より碑前祭、十八時より懇親会。十九日は観音峠まで車。茅ヶ岳の東、曲岳(まがり岳、一六四二尺、三等三角点)急登一時間。かえりに、山梨県立文学館にて「旅の文学―山梨の自然と人」特別企画展を鑑賞。甲府駅にて解散

申込

〒400 甲府市武田三六二一七
山村正光 TEL 0552-51-3175
(夜間) 五月十日まで。定員五〇名にて締切り

山岳地域における 自然エネルギー利用 に関するシンポジウム

森 武 昭

平成二年五月十二日(土)に東京渋谷

の青山学院大学で科学研究委員会主催の「山岳地域における自然エネルギー利用」に関するシンポジウムが開催された。このシンポジウムは、自然エネルギー(風力・太陽光・水力など)を利用した発電システムの意義を広く理解してもらうために開催されたもので、日頃から自然環境問題に関心をもたれている皇太子殿下も一会員として出席

され、熱心に講師の話をお聞きになった。当日は、会員の他に、山小屋関係者やエネルギー問題に関心のある方、報道関係者など二〇三名が出席した。シンポジウムは、午後一時三十分から四時間にわたって開催され、筆者が司会を担当した。最初に主催者を代表して、科学研究委員会の徳久球雄委員長が、出席者へのお礼とこのシンポジウムの意義について挨拶された。次に、当日の講師九名が紹介され、本題に入った。

最初に、会員の鳥居亮氏が全体像を理解してもらうために総論として概略次のような講演を行った。(1)自然エネルギー利用発電は、自然と調和した枯渇することのないクリーンエネルギーであることが最大の長所であり、燃料の運搬が不要となることもあって山小屋の電源として極めて有効である。(2)山小屋における自然エネルギー利用の実用化は、ここ二、三年で急速に普及し、現在六十三ヶ所所で採用され、その中心は太陽光の五十ヶ所所である。(3)山小屋では、気象条件等を考慮して複数の自然エネルギー源を用いたハイブリッドシステムが有効である。(4)ミニ水力発電は、水量と落差が確保できれば、常時電力が得られることが大きな魅力となっている。

続いて、山小屋関係者として、穂高

岳山荘経営主の今田英雄氏が自然エネルギーを利用したお蔭で、ヘリで空輸するドラムカンの量が五分の一以下に減ったなどの実績を報告した。次に本沢温泉グループ代表の原田茂氏がハケ岳の三つの小屋での実績を説明し、自然エネルギー利用が大きな威力を発揮していることを紹介した。さらにメーカーから、昭和シェル石油の原田恒久氏が国からの補助を得て白馬山荘で実施中の大規模実用化研究(太陽光が約七〇誌、風力一誌)の経過と今後の課題について、京セラの本多潤一氏が山小屋と同じような条件にある諸施設における太陽電池のいろいろな応用例の紹介を行った。

中間での活発な質疑応答と休憩の後、会員の大貫敏史氏が、三國友好チョモランマ/サガルマータ登山隊で無線通信の電源として太陽電池を使用し、大いに役立った旨を説明した。次に、会員の貴田宗男氏が主にカモシカ同人隊がヒマラヤで使用した例を紹介した。続いて、南極での風力発電の実用化を目指している木村茂雄氏から、ブリザードや雪などの悪気象条件による影響にいろいろな配慮を払った試作機で、現在までに風洞実験や低温実験などを行ない、平成二年十一月に設置この南極風車は、平成三年一月に設置

され、稼働し始めた旨、現地から報告されている。

最後に筆者が、まとめとして、主に今後の課題として、立地条件に適したシステム設計の重要性などの技術的課題を指摘した。

このシンポジウムを通して、特に目立った点を要約すると次の通りである。

①さらに太陽電池を普及させるためには、低価格化が必要である。そのためには、一般家庭で実用化し余剰電力を電力会社がい取るような制度の採用が必要である。

②バッテリーなどの付帯設備の小型化と低価格化が必要である。特に、登



シンポジウムが開催された青山学院大学の会場

山隊で使用する場合には、この点が最大の難点となっている。

③自然環境との調和に関する環境行政や電気事業法の適用など法律上の手続きで行政の理解が得られるようにさらに努力していく必要がある。

地球環境問題などが指摘される中で、一向に進まない自然エネルギー利用が、山小屋では急速に普及しつつある現状で開かれたためか、山小屋関係者のみならずむしろエネルギー問題そのものに関心のある出席者から多くの質問や意見が出されたのが注目された。

〔筆者注〕筆者等の手違いにより、昨年五月に開催されたシンポジウムの報告が大変遅くなってしまったことをお詫びいたします。なお、当日の予稿集がまだ若干残っていますので、ご希望の方は、JAC事務局内、科学研究委員会あてに、六七五円(送料込)を同封して申し込んで下さい。

会務報告

二月理事会

二月十四日 十八時三〇分
場所 本会会議室

出席者 山田会長、村木、藤平両副会長、松田、西村、重広、伊丹、早坂、

小林、入沢、小倉、穴田、石橋、織田、関口、松本、神崎、藤井の各理事、小倉、橋本、大島各常任評議員、太田、飯野両監事

〔委任〕鳴原常任評議員
議事

(1)ナムチャバルワ登山の件

・NHKが後援という形で、参画することとなったが、登山の準備はNHKを加えた四者で行いたい。

・北京の技術委員会には、本会からは村木副会長、重広常務理事の二名を派遣する。他に読売、NHK、日中友好協会からも出席する。

・三月六日、北京会議の結論をまったく実行委員会を開き、隊長の選任を行いたい。

・募金については、日山協の常務理事会を通じ指定寄付の内諾が得られたので、五月から活動を開始したい。

(2)組織の改編について(松田)

山田会長試案につき、検討方要請があったので、在京の常務理事、常任評議員で検討した結果についての報告があった。

即ち、従来各委員会を担当する理事の性格が明確になっていなかったが、会長試案通り、各委員会を担当する理事の業務を次のようにグループ分けする。

①執行機関である理事会の業務を担当

するライン部門としての総務、経理・財務、出版、会務の四部門。

②理事会のスタッフ部門としての専門委員会。科学研究、登山医学、自然保護、図書研究等の委員会

③会員サービス、クラブライフを楽しむための部会。学生部、青年部、婦人部等

本件につき種々と質疑応答が行われたが、原則的にはこの案で、特に問題はないことが確認されたので、各委員会の意見も聞いた上で、前向きに検討することにした。

(3)平成三年度事業計画(案)検討の件
各委員会の計画をまとめた原案の説明があった。三月の委員会迄に内容をさらに検討することにする。

(4)平成三年度事業予算(案)検討の件
西村理事作成の原案にもとずき、平成二年度末の期末推計、収支予算編成方針、これにもとづく予算案の説明が行われた。三月の理事会迄に委員会別の予算についての個別接衝を行って調整し、予算案を確定したい。

(5)その他審議、報告事項
①横有恒全集刊行の件
有料での宛名カードの発行を了承する。

②ティム・マッカートニー・スネイプ講演会、名義後援の件了承する。

③『60歳からの日本三百名山』刊行

の件

田中三郎会員から、本会選定三百名山の字句を使用したい旨の届出があり、本件承認する。

④終身会費の還元金の件

福岡支部の馬場猛会員から、終身会費を納付した場合の還元金がないのは不合理である旨の提案があり、事務局で検討の結果、納付金額の10%を還元金として還元しては如何との説明があった。本件大筋は了承されたが、五月の支部長会議にもかけた上で決定する。

⑤緑蔭書房に対し、山岳総目録の製作費、分担金支払いの件

半額の六〇万円を前払いすること

⑥JOCスポーツマンカードの件

⑦日山協との合同専門委員会開催の件、二月十八日開催する。

⑧秩父宮記念学術賞受賞式が三月十三日、日本工業倶楽部で開催される。

⑨放送文化基金助成・援助金決定の件

本会のナムチャバルワ登山計画に対し四〇〇万円の交付が決定。三月八日に贈呈式が行われる。

⑩会報臨時増刊号の件

篠田名誉会員問題に対する特集号を五五〇号の増刊の形で横組みで刊行する。

(6)各委員会報告

・自然保護(松本)

鳥海山スキー場開発についての要望書は、時間的な問題もあり、一部字句を修正した上で、二月下旬、委員長名にて八幡町長に提出する。

・財務(西村)

冬用テント等を購入する予算が組まれているが、青年部において管理規定を作成して欲しい。

・総務(藤井)

三月十六日、オリエンテーション、四月十四日、さくらハイクを予定。

・資料(織田沢)

植名譽会員の遺品は、三月に入ったら、大町山岳博物館、松本アルプス館、スイス山岳博物館等に寄託保管をお願いする予定。

・集会(入沢)

二月十七日、黒斑山現地小集会、二〇名参加の予定。

・山研(石橋)

改築案図面を環境庁に提出、説明した結果、原案でOKの内諾を得た。

・指導(小林)

山スキー技術講習会の第一回目は、三月十五、十六日、至仏岳で実施の予定。

・青年部(早坂)

大学山岳部の五年部員を加え、二月九、十一日、八ヶ岳赤岳鉾泉をベース

に、氷雪合宿を行った。十二名参加。

・高所登山(早坂)

三月七日、ナムチャバルワ偵察隊の報告会を開催する。

・海外(神崎)

HATJの入会申込は五四〇名に達した。十一月の国際会議に参加する各国のトラステイからの返事も順調に届いている。

日山協主催によるワールドカップの審判研修会が、アジア諸国からの参加者十名を含め、二月十七、二十四日、東京で実施される予定。



3234-6659

この電話でもお知らせしています

●東海支部設立三十周年記念晩餐会

このたび東海支部では設立三十周年を記念して、左記のとおり晩餐会を開催いたします。会員多数のご出席をお待ちしています。

記

日時 平成三年六月一日(土)午後四時

開場

場所 名古屋郵便貯金会館

内容

第一部 式典および講演会

講師 重廣恒夫氏(ナムチャ・バルワ偵察隊長)(予定)

第二部 記念ミニ・コンサート(ピアノ演奏と合唱)

第三部 懇親会

申込先 〒460名古屋市中区橋一、二七

一八(株)尾上機械気付 日本山岳

会東海支部

☎〇五二二三三二二二一

●若葉山行のお知らせ

恒例の若葉山行は本年は岩手支部との共催で、左記によりみちのくの名山「七時雨山」で行う事と致しました。車之走峠より七時雨山へ登り帰路は田代平高原放牧場を通り下山しますが、丁度この時季にはワラビや行者ニンニク等の山菜がたくさん出る頃ですのでその面でも楽しめると思っています。懇親会は当地特産の短角牛のバーベキューをたっぷり召し上って戴く予定です。翌日は青森県境にある稲庭岳に登って帰路につきます。なお、当地は鉄道による連絡がありませんので、東京よりバスを出す予定です。

記

月日 平成三年六月八日(土)・九日(日)

場所 七時雨山(約三時間)、稲庭岳

(約二時間)

集合 直接行かれる方は、八日午前九

時、七時雨山荘前(花輪線荒屋新町駅よりタクシー三十分、二千二百円位)

宿泊 岩手県田代平高原 七時雨山荘

〇一九五七二二二〇三

持物 雨具、水筒、防寒具、八日の朝食、昼食(九日の昼食は支給します。)

費用 九〇〇〇円

バス代は往復一万二千円位

申込 山岳会事務局迄。申込者には追って詳細ご連絡申し上げます。

なお、バスは定員になり次第打ち切と致します(四十五名)。

(集委員会)

●親睦登山会・大佐渡の山と里

越後支部

期日 平成三年五月二十五日(土)～二十六日(日)

集合受付 二十五日午前十時、新潟港

佐渡汽船ターミナル待合室

行程 Aコース二十五日 両津→国仲

史蹟巡り→相川泊り。二十六日 相

川→金北山→主稜縦走→蛇喰高原→

石花→外海府巡り→蔵元探訪→両津

港着、解散。

Sコース(希望者のみ)二十六日の解

散後両津泊り、二十七日(月)両津→ドンデン山→青粘越→梅津登山口→

両津港着、解散。(注：車、徒歩)

費用 Aコースは一万五千元(一泊二

日三食、船賃含)。Sコースは一万五千元追加

満開のレンゲツツジほか山の花々で飾られた、大佐渡主稜の遊歩です。そして島の里ならではの素朴な人情、ロマンを探訪してみませんか。

申込み先 〒951新潟市宮所通一番町

学生書房方 日本山岳会越後支

部へ四月三十日までに。詳細の実施要項をお送りします。

注 Sコースもご希望の場合は、その旨を併記してください。

予告

●自然保護全国集会

自然保護委員会

平成三年度全国集会を越後支部のご支援のもとに左記のように開催します。詳細は次号でお知らせします。

記

日時 平成三年六月二十九日(土)～三十日(日)

場所 新潟県新発田市五十公野(いじみの)公園「青年の家」ほか。

タンボチエ僧院再建協力

募金者ご芳名

十万円(株)アトラストレック代表取締役磯野剛太。三万円(株)アドベン

チャールロード代表取締役前谷東雄。二万円(細谷文造。一万円(中村正幸、無名山塾。五千円(佐々木誠、水村通子、小池正夫、岡本康夫。

三月二日現在累計四三三三名、累計金額五、七五二、三四〇円。

訂正 一月(五四七)号 十六頁、住所

二月(五四八)号 二頁、海外の山下段前から四行目、期。↓期とみて出かけた」と、岩坪五郎対策本部長は言う。に追加訂正致します。

編集後記 湾岸戦争が終ってホッと一息ですが、『山』の方はまことに多事多難です。このところ臨時増刊号、目録の作成と編集部はてんでこまいの忙しさです。乞う支援のほど(A・O)

平成三年四月二十日発行

102 東京都千代田区四番町五―四

サンビュウハイツ四番町

発行所 法人 日本山岳会

発行者 山田二郎

編集代表 小倉厚

電話東京(326) 四四三三

振替口座 東京三―四八二九番

東京都港区赤坂一―三―六

印刷所 株式会社技報堂